

マルコによる福音書 15 章 33 節～47 節

2019 年 4 月 25 日

古本 靖久

1、聖歌 455 番 「主にのみ 十字架を」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 96 ページ）

4、テキストの位置

今日の箇所は、イエス様の十字架の死と墓への葬りです。前回十字架につけられたイエス様ですが、そこでは一言も語られませんでした。

伝統的にイエス様の言葉は「十字架上のキリストの最後の 7 つの言葉」とまとめられており、受苦日

礼拝などで読まれることがあります。その言葉とは、以下の 7 つです。

エルサレムにて	金曜日	15:1-5	ピラトの尋問
		15:6-15	バラバとイエス
		15:16-20	兵士の嘲弄
		15:21-32	十字架
		15:33-41	死
		15:42-47	墓
	日曜日	16:1-8	復活
		16:9～	結び

「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」(ルカ 23 : 34)

「はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」(ルカ 23 : 43)

「婦人よ、御覧なさい。あなたの子です」「見なさい。あなたの母です」(ヨハネ 19 : 26,27)

「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」(マルコ 15 : 34) → (マタイ 27 : 46 「エリ」)

「渴く」(ヨハネ 19 : 28)

「成し遂げられた」(ヨハネ 19 : 30)

「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」(ルカ 23 : 46)

マルコとマタイには、イエス様の言葉は一つしか記されておられません。マルコより後代に編集されたルカとヨハネが、3 つずつの言葉を残したのとは対照的です。ではマルコでは、イエス様の死の場面はどのように描かれているのでしょうか。またそこには、どのような人物が関わっていくのでしょうか。

5、節ごとに

◆十字架

15:33 (そして) 昼の十二時になると、全地は暗くなり (に暗闇が生じ)、それが (午後) 三時まで続いた。

イエス様が十字架につけられたのは、午前 9 時でした。その 3 時間後の昼の 12 時に全地に暗闇が生じ、それが 3 時間続きます。アモス書 8 章 9 節にはこのようにあります。「その日が来ると、と主なる神は言われる。わたしは真昼に太陽を沈ませ 白昼に大地を闇とする。」三時間ごとの区切りがここで三つ経過し、終わりの時を迎えます。

古くから、偉人の死には天のしるしが伴うと考えられていました。ユリウス・カエサルの死の際にも、太陽が暗くなったと言われます。しかしここでの暗闇は、神の裁きや接近を知らせているように思います。

15:34 (そして) 三時にイエスは大声で叫ばれた。「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。」これは (訳すと)、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。

ここでイエス様は、十字架の七聖語の一つを叫びます。この言葉は詩編 22 編の冒頭部分です。詩編 22 編の最初の 3 分の 2 は、絶望に近い叫びです。しかし最後の 3 分の 1 で神さまへの賛美に変わっていくため、イエス様は本当は神さまをほめたたえているのだという解釈をする人もいます。しかし果たしてそうでしょうか。

イエス様は人々に見棄てられました。そして今、神さまは沈黙しておられます。まさに孤独の中で、イエス様は最後の叫び声をあげられるのです。そして見方を変えると、イエス様はこの苦痛の中でも、神さまから離れず、むしろしがみつこうとされているのです。

15:35 (そして) そばに居合わせた (立っていた) 人々のうちには (何人かが)、これを聞いて、「そら (見よ)、エリヤを呼んでいる」と言う者がい (っ) た。

「エロイ、エロイ」はアラム語ですが、マタイ福音書では「エリ、エリ」というヘブライ語として書かれています。「エリ、エリ」であれば、「エリヤ」と聞こえてもおかしくはありません。

エリヤは旧約聖書に出てくる預言者です。列王記下 2 章 9～12 節には、エリヤは死ぬことなく直接天に移されたと書かれています。そのためユダヤ人は、エリヤはメシアの先駆者として再来すると考えていました。さらに、エリヤは窮地にある敬虔な人を助けるとも信じられていたようです。

15:36 (そして) ある者が走り寄り (って行き)、海綿に酸いぶどう酒を (を酢で満たし) 含ませて葦の棒に付け、「待て、エリヤが彼を降ろしに来るかどうか、見ていよう」と言いながら、イエス (彼) に飲ませようとした。

「酸いぶどう酒」と訳されている飲み物は、水と卵と酢を混ぜた飲み物で、ローマ人が好んで飲んでいました。彼らは疲労回復のために、これを飲んでいました。それをイエス様に飲ませたのは、エリヤが本当に来るかどうか、確かめたかったからなのでしょう。

15:37 しかし、イエスは大声を出して息を引き取られた。

ここでイエス様は、どのような声を出されたのでしょうか。マルコ福音書は、イエス様の死の瞬間を驚くほど簡潔に描写します。

ルカ福音書では、「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」(23:46)と神さまにすべてを委ねられました。またヨハネ福音書では、「成し遂げられた」(19:30)という勝利の叫びをあげられました。しかしここでのイエス様は、34節の嘆きの言葉以外何も語られません。

15:38 すると、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂けた。

神殿の垂れ幕が裂けたことには、二つの意味があります。一つは神殿やユダヤの民に対する裁きの前兆です。エルサレム神殿の崩壊がその大きな出来事として挙げられます。

そしてもう一つは、神殿祭儀の崩壊です。それまではある選ばれた民族が、決められた方法でのみ神さまに近づけると考えられていました。しかし神殿の垂れ幕が裂けた今、すべての人間と神さまとを遮るものはなくなりました。イエス様の死によって、わたしたちは神さまの恵みに自由に近づくことができるようになったのです。

15:39 百人隊長がイエス (彼) の方を向いて、そばに立っていた (百人隊長は)。そして、イエス (彼) がこのように息を引き取られたのを見て、「本当に、この人は (こそ) 神の子だった」と言った。

百人隊長は、いわゆる「異邦人」です。ユダヤ人ではありません。公生涯の最初にイエス様が洗礼を受けられたとき、天から「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声がしました。つまりイエス様は「神の子」だという宣言です。

そして今、異邦人である百人隊長が、イエス様こそ「神の子」であると告白します。この信仰告白は、マルコ福音書の読者を、そしてわたしたちを代表してなされているのではないのでしょうか。

15:40 また、婦人（女）たちも遠くから見守っていた。その中には、マグダラのマリア、小ヤコブとヨセの母マリア、そしてサロメがいた。

イエス様の十字架を見守っていたのは弟子たちではなく、女性たちでした。ルカ福音書には名前は出てきませんが、他の福音書と共通する人物は「マグダラのマリア」です。彼女はイエス様によって病気をいやされた一人です。

また小ヤコブとヨセの母マリアとは、イエス様の母マリアであると考えられます。なぜならイエス様の母マリアはヨハネ福音書でも言及されていますし、マルコ 6:3 にはイエス様にはヤコブとヨセという兄弟がいたとも書かれています。「小」というのは身長が低かったり、年齢が若かったりするとき他の人との区別のためにつけられていたようです。



15:41 この婦人（彼女）たちは、イエス（彼）がガリラヤにおられたとき、イエス（彼）に従って来て（い、）世話をしていた（仕えていた）人々である。なおそのほかにも、イエス（彼）と共にエルサレムへ上って来た婦人（女）たちが大勢いた。

この女性たちは、ガリラヤからイエス様に従っていました。新共同訳聖書で「世話をしていた」と訳されている語は、正確には「仕える」という言葉です。原語「ディアコネオー」には、執事（ディアコノス）の務めをするという意味があります。

つまりこの女性たちはイエス様の身の周りの世話をするだけではなく、弟子のように仕えていたのです。この時代、女性の地位は大変低く、聖書にも男性の弟子しか登場しません。しかしマグダラのマリアなど、実際には女性の弟子もいたと考えられています。男性の弟子たちは逃げましたが、女性の弟子たちはイエス様のそばを離れませんでした。

◆墓

15:42 （そして）既に夕方になった。その日は準備の日、すなわち安息日の前日であったので、

イエス様が十字架につけられたのは、金曜日の朝 9 時でした。そして午後 3 時にイエス様は息を引き取ります。金曜日の日没から安息日が始まるため、埋葬の準備は素早くしなければなりません。もしも安息日が始まってしまったら、次の日の日没まで何もすることができなくなります。

しかしイエス様の弟子たちは、イエス様の遺体を引き取りには来ませんでした。

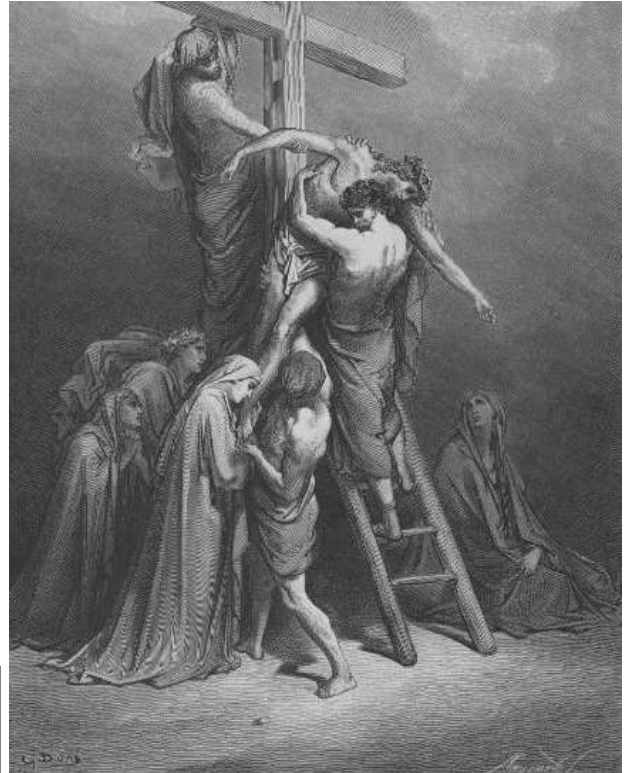
15:43 アリマタヤ出身で身分の高い（立派な）議員ヨセフが来て、勇気を出して（意を決して）ピラトのところへ行き、イエスの遺体を渡してくれるようにと願い出た。この人も神の国を待ち望んでいたのである。

アリマタヤのヨセフは議員でした。最高法院（サンヘドリン）の一人か、あるいは地方議会の議員であったのかは分かりません。しかしユダヤ人であったことは確かです。

一般的なユダヤ人なら誰も、神の国を待ち望んでいました。このことだけで、ヨセフをイエス様の熱心な支持者だと考えることはできません。しかしヨハネ福音書では彼を「隠れたイエス様の弟子」として紹介します。彼はイエス様の遺体を引き取ろうとします。

ちなみにマタイ福音書はヨセフを「金持ち」と、ルカでは「善良な正しい人」と形容しています。

15:44 ピラトは、イエス（彼）がもう死んでしまったのかと不思議に思い（驚き）、百人隊長を呼び寄せて、既に死んだかどうかを（のかと）尋ねた。



十字架に架けられた人は、長い場合は 48 時間以上も苦しみ続け、死を迎えるといえます。しかしイエス様は、十字架につけられてからまだ 6 時間です。「本当に死んだのか」とピラトが驚いても、不思議ではありません。

しかしこの節は、大きな意味を持ちます。それは「イエス様の死は真実だった」ことを証明するということです。イエス様の復活が語られるとき、このように思う人もいるかもしれませんが、「イエス様は実は十字架上で死んだのではなく、仮死状態だったのだ」と。

そのような噂を排除するためにも、百人隊長の証言が必要だったのです。

15:45 そして、百人隊長に確かめたうえ（てから）、（彼は彼の）遺体をヨセフに下げ渡した。

ユダヤの慣習では、死刑を執行された犯罪人は自分の墓を持つことはできませんでした。しかしローマでは、遺体は家族や親戚、友人などに渡すことになっていました。

15:46 (そして) ヨセフは亜麻布を買い、イエス(彼)を十字架から降ろしてその布で巻き(に包み)、岩を掘って作った墓の中に(彼を)納め、墓の入り口には石を転がしておいた。

岩を掘ってつくられた墓は、ゴルゴタの近辺にも多く見られました。この墓は、他の福音書では「まだだれも葬られたことのない」ものであり、マタイ福音書ではアリマタヤのヨセフの持ち物であったと書かれています。多分そうなのでしょう。

通常、墓の入り口には石を転がしておきました。野獣から遺体を守るためです。しかしここでは、墓が封印されたことも、協調されているようです。

15:47 マグダラのマリアとヨセの母マリアとは、イエスの遺体を(彼が)納め(られ)た場所を見つめていた。

イエス様の十字架を遠くから見守っていた女性のうち、マグダラのマリアとヨセの母マリア(多分イエス様の母マリア)の二人は、墓の場所を確認します。その理由は、来月の箇所でも明らかになります。

ここでもマグダラのマリアが登場します。彼女は、「十字架・墓・復活」において、大きな役割を果たしていきます。

次回、いよいよ復活の場面に入ります。彼女たちがいなければ、イエス様の復活はどうなっていたのでしょうか。



<今日の箇所から>

イエス様は十字架の上で、叫ばれました。「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という言葉は、神の子にはふさわしくないのかもしれません。しかしイエス様は、十字架の上で本当の痛みと苦しみを味わわれたのです。

だからわたしたちの痛みを分かってくださる。苦しむわたしたちを理解し、手を差し伸べてくださるのです。そのことを深く感じながら、イエス様の十字架に向き合っていきたいと思います。

今回の学びはこれで終わります。次回は 5 月 23 日(木)10 時半からです。「復活」(マルコ 16:1~8) について学んでいきます。